皆川盤水・俳句の旅 その❶

今年の一泊二日の本部吟行会は、五月十七日（土）・十八日（日）で皆川盤水先生の故郷、いわき市を訪ねる予定です。詳細な計画は事業部で検討していますが、先生の句碑の立つ閼伽井嶽、白水阿弥陀堂をはじめ、植田を縫って勿来の関など芭蕉の足跡も訪ねて、詩心を満たすことのできる充実した旅が約束されております。

旅に先立ち入念な準備をすることは常々主宰の主張されていることでありますので、二月号～五月号の四回に分けて、皆川盤水俳句を勉強しておきたいと思います。先ずその第一歩として「銀漢」平成二十三年創刊号より二十五年十二月号に掲載された主宰選の三十六句をもう一度おさらいし、盤水俳句の神髄に触れてゆきましょう。

【盤水俳句・今月の一句　伊藤伊那男選】

初鴉面を上げて鳴きにけり　『山晴』
鰭酒のすぐ効きてきておそろしや　『随処』
寒鴉雲を見てゐてゐずなりぬ　『随処』
春の滝力を出してきたりけり　『山海抄』
花曇り工員が消す残置燈　『積荷』
廃銀山馬鈴薯の花ここに尽く　『銀山』

胸にくる昼の蚊太し平泉　『積荷』
ふるさとの帰りもたさる盆鰹　句集未収録
風の盆踊衣装の早稲のいろ　『板谷峠』
簗番が高嶺の星を褒めあへる　『暁紅』
枯芦のゆたかにけふの日をとどむ　『板谷峠』
蟷螂のとびつきざまに枯れてをり　『随處』
獅子舞がすたすたゆけり最短路　『積荷』
盆梅が満開となり酒買ひに　『銀山』
一つ一つこけしを拭くや春隣　『山海抄』
本郷に鮭焼く匂ひ啄木忌　『山晴』
早苗饗や茂吉の家の牛やさし　『銀山』
鰻食ふカラーの固さもてあます　『銀山』
泥鰌鍋囲む顔振れ揃ひけり　『寒靄』
羽黒山涼し木綿しめかけてより　『随処』
啄木の小学校に秋蛙　『寒靄』